
ひとりごと

芙美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひとりごと

【Nコード】

N2816R

【作者名】

芙美

【あらすじ】

カフェでバイトする大学生男女四人の物語。それぞれが主人公。それぞれの青春。現在、遼くんの幼稚園のお話。

1 遠・ヒーローになりたい？

僕は、ヒーローになりたかった。

僕がまだ六歳くらいの幼い頃。その頃の僕はまだ何も知らない、まっすぐに純粋な子供だった。

だから通っていた幼稚園で女の子が男の子三人にからかわれて泣いているのを、なんの恐怖もなく止めに行くことができたのだろう。

女の子が男の子三人に囲まれて泣いていた。

男の子ははしゃぐように「ちゆるちゆる」変な髪形」とメロデーをつけて女の子の髪形をからかっていた。

女の子は髪を二つに結んだ髪をくるくる巻いている、とても可愛らしい子だった。

気を引くために意地悪を言っていたのかもしれないが、僕にそんなことわかるわけがなく、ただただ涙を流す女の子がかわいそうに思えた。

「やめるよ。かわいそうだろ」

僕は泣いている女の子の前に立ち、後ろにいる女の子を両手を広げて三人からかばった。

男らしく間に入ったのはいいが、今度は僕が女の子の代わりに囲まれてしまった。僕はけんかなんてしたことがない。

「なんだよおまえ」

先ほどの女の子に対しては口でからかう程度だったのだが、相手が僕となると容赦ない。

三人は「蹴りい」だとか「波つ」だとか「ビーム」だとか技の名前を口にしながら僕に襲い掛かった。

僕は生まれて初めての暴力に抗う術も知らず、うずくまってやられるがままだった。

それは実際には五分もしない小競り合いで、僕は日常で負うような少し擦りむいた程度の怪我しかしなかったのだが、僕にとってはそれでも十分恐ろしかった。

「もういいや。おまえよわいなあ」

リーダーのまもるくんはやられっぱなしで無抵抗の僕に呆れて、その言葉にも僕は傷ついた。

その後、弱いながらも飛び出した僕を気に入ったらしく、まもるくんは僕にしつこく構うようになった。

僕は友達がいなかった。幼いながらも人づきあいが苦手だった。みんなで遊ぶような時でも、強制でなければ一人で遊んだ。

すみっこで、いかにうまく石を安定して高く積み上げるか、落ち葉の形の違い研究、恰好良い砂の城の建築などなど、一人でも割と楽しくやっていた。

僕は、知りたいことや行動した結果を、一人で突き詰めて考えるのが好きだったのだ。

他の人間がいたら「こうした方がいい」と言って手を加えて、僕が苦労して作ったものを買えたり崩したりする。僕は目の前で壊されていくのを放心状態で見えていくだけだった。

一人がいい。一人は面倒くさくない。それが幼い僕がだした結論だ。

でもまもるくんはガキ大将でやんちゃで迷惑な子供だったが、僕の邪魔をすることはなかった。見るだけならいいか、と僕は思った。一人でいることを頑固に守りたいわけでもないわけでもない。臨機応変というやつだ。

まもるくんはよく、何かやっている僕の周りを興味あり気にうるついた。

「おまえ、何やってるんだ？それはどうなるんだ？なんでそんなことやってるんだ？」

質問攻めも、嫌ではなかった。

「これはね」

そうやって説明していると考えがまとまってすっきりしたし、自分がすごいことをやっているという気分になれた。まもるくんが大げさに感心するからだ。

「へええ、おまえあたまいいなあ。すげえ」

「へへ」

腕を組んで感心するまもるくに僕は得意げに笑った。褒められるのは嫌いじゃない。

「けんかはよわいけどな」

まもるくんは調子に乗る僕をからかうように、笑いながら軽くパンチをする。僕も笑ってそれを受ける。

「がんばれよ」

そして僕の背中を叩き、まもるくんは友達の元へと奇声を発して走って行くのだった。

僕とまもるくんはそんな風にして友達になった。

まもるくんは大の特撮好きだった。僕はまもるくんの家に行く度に録画したテレビ番組やDVDや買ってもらったフィギュアなんかを見せられた。

僕は暴力が嫌いで、最初は嫌々見ていたのだが、次第に僕も夢中になっていった。

暴力を好きになったわけではない。時には自分を犠牲にしなが、人々を救うヒーローに僕は憧れた。

正しくて大きな存在、それが僕にとってのヒーローだった。

「僕も、ヒーローになる！」

一度あまりにも気持ちが昂ってそう口にしたことがある。

「けんかよわいくせに。むりむり」

ししし、と笑うまもるくんを僕はきつと睨むようにして

「暴力はよくない。僕は戦わないヒーローになる！」

と宣言した。この時は本当にそういう気持ちだったが、すぐに忘

れてしまった。戦わないヒーローなんて何をするのかもわからない。
こんな風に、正反対ではあるが、僕とまもるくんはとても仲良し
だった。

2 遠・ヒーローになりたい？

ある日、前にまもるくんからかわれていた女の子が泣いていた。みんなが女の子を取り囲む。

「ぴよんたんが、いなくなつたあ」

みんなに事情を聞かれていた女の子は号泣しながらそう答えた。

「何してるんだ」

その時まもるくんが、みんなを押し分けて輪の中にはいつてきた。声を聞いた女の子が顔をあげて、まもるくんにつかみかかる。

「まもるくん、ぴよんたんを隠したでしょう。ぴよんたん返して！返して！！」

いつもか弱く泣いてばかりだった女の子が、すごい勢いでまもるくんに詰め寄る。

僕も驚いたが、恐らくまもるくんはもつと驚いていただろう。

「ぴよんたん、っていつも持つてるうさぎの人形か。なんだか知らねえけど、俺じゃねえよ」

まもるくんは困った顔をしていたが、女の子は「返して」の一点張りで、まもるくんが隠したものと信じてしまっているようだ。

でも僕は違うと思う。

まもるくんは意地悪をして喜ぶどうしようもない部分もあるけれど、陰でこそこそ人形を隠すようなせこい人間ではないからだ。僕のしっているまもるくんはそんな卑怯者ではない。と思う、たぶん。結局先生がきて女の子をなんとかなだめてその場は落ち着いた。しかしうやむやになってしまったせいで誤解が解けずに、みんなは疑惑の目でまもるくんを見ているようだった。

まもるくんはずつとやっついていないと言っていたが、日ごろの態度が悪すぎるのだ。みんなまもるくんの言葉を信じることができない。

ぼつんとしているまもるくんに、僕は近づいていった。

「僕、まもるくんのこと信じるよ」

僕がそう言うと、まもるくんは少し目を潤ませた。

「ありがとう」

まもるくんは無理やり笑って、立ち上がった。

「どこに行くの」

「ぴよん助を探しに行くんだよ」

今はみんなで畑いじりをしている時間なのに、先生の目を盗んで抜け出そうというのだ。可能かもしれないけど、いいことではない。しかし駄目だよ、と言う間もなくまもるくんはすばやく動き遠くに行ってしまった。

僕ははらはらしながら時間を過ごしていたが、先生が気が付く前にまもるくんは帰ってきてくれた。

「もう、まもるくん駄目だよ！」

僕は先生の代わりにまもるくんにこういった場合に誰が迷惑な思いをするかだとか、どんな危険があるかだとか、過去にどういうことが起こったとか、くどくどと言って聞かせた。

我ながらめんどくさいことをしてるなと思うが、そもそもまもるくんのことという周りのことを考えない性格が、先ほどの疑惑の種のような気がしたので言わずにはいられなかった。

めずらしく、まもるくんがしゅんとして僕の話聞いていた。

全部話し終ると、まもるくんがすっかりとうなずいた。

「わかったよ、心配かけてすまなかったな。……ところでひとつ、お前にお願ひがあるんだ」

まもるくんは真剣な顔をするので、僕は少しびびってしまった。嫌な予感がする、きつとろくなことではないだろう。

「これ、あいつに渡してほしいんだ」

まもるくんはおなかからうさぎのぬいぐるみを取り出した。こいつがぴよん、なのか。

「俺、朝にあいつが遊ぶ前にこれを脇に置いたのを見てたんだ。遊んだあと取りに行くだろうと思って気にしてなかったけど」

実はな、と気まずそうにまもるくんが話し出す。

「なんでそれ言わなかったの」

ちゃんとみんなにも言えば、あんな思いをすることもなかったのに。

「あんだけ騒いでて、あいつが忘れてただけなんて、あいつが恥ずかしい思いするだろ。まあ、俺様はどう言われてもかまやしねえ。お前は信じてくれたみたいだしな」

まもるくんがはにかんで見せた。

「だからお前が見つけたふりして、渡してやってくれよ。その方が、あいつ、喜ぶからさ」

僕は猛烈にくやしくなった。まもるくんの手柄をとるようでは僕はいやだったし、きちっと発表してまもるくんの汚名を晴らしたい。

「やだよ、まもるくんが渡すべ……」

そしてまたもやまもるくんは話の途中でいなくなるのだった。

しばらくして、女の子が走ってこちらにやってきた。

「遼くん、ぴよんたんを見つけてくれたって、本当」

目を輝かせてこちらを見てくる。僕の手の中にはうさぎの人形。

ため息のするような状況だった。

僕は無言でうさぎを渡した。

「ありがとう！」

女の子はうさぎを抱きしめた。忘れてしまったものの、大事な人形だったのだろう。よかったけどどうしたってまもるくん気になる。

「あのさあ、それ見つけたのは僕じゃなくてまもるくんなんだよ。君は誤解してるみたいだけど、まもるくんは人形を隠すような悪いやつじゃない。いつも君に色々言うのは……その……照れ隠しみたいなものだから。素直じゃないまもるくんの代わりに僕が謝るよ。ごめん。あのさ、ほんと、まもるくんは良いやつだよ。……それだけ」

女の子は黙って聞いていた。

ぼーっと僕を見てくるので、僕は居た堪れずその場を去った。女の子はあくまでもまもるくんをかばう僕を、呆れていたのだから。まあ別にいいや、どう思われても。

後でまもるくんには人形を渡したということだけ話した。余計なことを言つなと言われるだろうから、僕が女の子にした話は黙っていた。

「そうかそうか、ご苦労だったな」

まもるくんは僕の背中を強く叩き、大きな声で笑った。あんなことがあったのにも通り陽気で強気だった。僕が呆れていると、まもるくんは宣言した。

「遼、よく聞け！」

珍しく名前を読んだ。

「俺は今日から正義の味方になる！」

そう言つてまもるくんはまた大きな声で笑った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2816r/>

ひとりごと

2011年12月18日05時45分発行